

■テーマ・対象分野:

初等・中等教育から高等教育、生涯教育に至るまで、これまでに例を見ない規模で情報教育が実践されるようになりました。教育内容が充実するとともに、さまざまなメディアやシステムを活用した情報教育が研究され、実践されています。小・中・高等学校では情報教育が教育課程に組み込まれ、大学の情報教育も、それを受けて教育内容や方法の見直しが進められています。また、情報通信技術（ICT）を教育内容として取り入れるだけでなく、授業支援として利用したり、新たなシステムを開発して情報教育で活用するような試みもあります。

このような現状を踏まえ、次世代の情報教育の目標、内容、方法、評価等を方向付けるためにも、これまでに実践されてきた情報教育の成果を論文としてまとめて共有することは有意義であると考え、ここに情報教育に関する特集号を企画いたしました。

具体的なキーワードとしては次のようなものを挙げることができますが、これらに限りません。広く情報教育に関する論文を募集いたします。

ICTを活用した情報教育、
情報処理教育、
プログラミング教育、
情報教育の教材および環境開発、
情報リテラシー教育、
情報活用能力の育成、
情報の科学的な理解、
初等教育・中等教育・高等教育・生涯教育における情報教育の実践、
情報倫理教育、
情報教育の内容・方法・評価、
情報教育指導者の育成・研修、
情報教育の理論・デザイン、コミュニケーション、プレゼンテーション、など

■発表申し込み要領:

以下のフォーマットにご記入の上、担当委員の松永（matunaga@kjo.setsunan.ac.jp）まで電子メールでお送りください。その際の subject は必ず“教育システム情報学会第6回研究会申込”としてください。

- (1) 発表タイトル
- (2) 著者名・所属（登壇者に○）
- (3) 発表概要（200字程度）
- (4) 連絡先住所・氏名・電話番号・メールアドレス
- (5) 研究会委員会によるコメントを（希望する / 希望しない）

■発表原稿の提出要領:

- (1) 原稿はA4用紙で、2枚以上8枚以下の偶数枚でお願いします。
- (2) 原稿は、学会誌巻末に掲載している学会誌原稿執筆要項に準拠してください。
- (3) 原稿送付先

●郵便で送付される場合

572-8508 大阪府寝屋川市池田中町17-8

摂南大学経営情報学部 松永公廣 宛

●電子メールで送付される場合

matunaga@kjo.setsunan.ac.jp

(注) PDF形式にて送信下さい。

■担当者（お問い合わせ先）:

松居辰則（早稲田大学）(matsui-t@waseda.jp)

小西達裕（静岡大学）(konishi@inf.shizuoka.ac.jp)

松永公廣（摂南大学）(matunaga@kjo.setsunan.ac.jp)

西野和典（九州工業大学）(nishinok@iizuka.isc.kyutech.ac.jp)

国際会議の案内

国際会議は、教育システム情報学会の会員のみなさんからの紹介やインターネット上で流れている CFP 情報をもとに編集されています。会員のみなさんに紹介したい国際会議などがありましたら、下記までご連絡ください。

また、実際に国際会議に参加されたレポートなどを送っていただければ今後の国際会議の案内作成の際に大変参考になりますので、そちらのほうもお待ちしております。

新着情報： 4 件

【本学会共催会議】

▼ITS' 2008: 9th International Conference on Intelligent Tutoring Systems

開催日程：2008年7月23日～7月27日
論文応募締切：2008年1月18日
開催地：Montreal, Canada
URL：<http://gdac.dinfo.uqam.ca/its2008/>

▼EISTA 2008: The 6th International Conference on Education and Information Systems, Technologies and Applications in the context of the 2nd International Multi-Conference on Society, Cybernetics and Informatics: IMSCI 2008

開催日程：2008年6月29日～7月2日
主催：International Institute of Informatics and Systemics (IIIS), Inter-American Organization for Higher Education (IOHE)
論文応募締切：2007年11月14日
開催地：Orlando, Florida, USA
URL：<http://www.socioinfocyper.org/imsci2008/website/default.asp?vc=5>

▼e-Society 2008: IADIS INTERNATIONAL CONFERENCE E-SOCIETY 2008

開催日程：2008年4月9日～4月12日
主催：International Association for Development of the Information Society (IADIS)
論文応募締切：2007年11月16日
開催地：Algarve, Portugal
URL：<http://www.esociety-conf.org/>

▼ICALT2008: The 8th IEEE International Conference on Advanced Learning Technologies

開催日程：2008年7月1日～7月5日
主催：IEEE Technical Committee on Learning Technology. IEEE Computer Society
論文応募締切：2008年1月15日
開催地：Santander, Cantabria, Spain
URL：<http://www.ask4research.info/icalt/2008/>

再掲情報： 1 件

▼ED-MEDIA2008: World Conference on Educational Multimedia, Hypermedia and Telecommunications

開催日程：2008年6月30日～7月4日
主催：Association for the Advancement of Computing in Education (AACE)
論文応募締切：2007年12月19日
開催地：オーストリア, ウィーン
URL：<http://www.aace.org/CONF/EDMEDIA/>

国際会議案内文責 松田 憲幸 (和歌山大学) E-mail：matsuda@sys.wakayama-u.ac.jp

2007 年 5 月 25 日 (金) に、NTT 武蔵野研究開発センターにおいて、2007 年度第 1 回研究会を開催した。9 時から 18 時まで特別講演 2 件を含む 16 件の講演が行われた。

参加者は 60 名であった。特別講演では、NTT の奥雅博氏から近年注目を集めている Web2.0 と e ラーニングの関わりについて、また、産業能率大の古賀暁彦氏から自らの経験から e ラーニングの社会的・教育的側面について、それぞれ興味深いお話があった。一般発表では、e ラーニングのシステム・ツール、インストラクショナルデザイン、e ラーニング活用のモデル、実践事例と、研究会テーマの「e ラーニング環境のデザインと HRD (Human Resource Development)」にふさわしい幅広い発表があった。各発表に対して活発な質疑応答・議論があり、この分野への関心の強さと広がりを感じることができた。研究会後には恒例の懇親会が実施され、参加者同士の交流を深めることができた。一般発表の概要は以下の通りである。

■開催日：2007 年 5 月 25 日 (金)

■会 場：NTT 武蔵野研究開発センタ

(1) 仮想学習環境における問題解決型学習を促進するためのセルフアセスメントの提案 —学習体験に基づく考察—

多賀万里子 (熊本大学大学院)、豊永正人 (熊本大学大学院、日立ソフトウェアエンジニアリング株式会社)、鈴木克明 (熊本大学大学院)

<あらまし>仮想学習環境における、問題解決型学習による学習体験から、「学習者自らが学習達成度を判断できる仕組みを提供することは、学習者に自信をつけ、学習のモチベーションを向上するために有効である」という仮説を立てた。本論文では、学習体験よりルーブリックによるセルフアセスメント・チェックリストを提案する。

(2) 韻律的情報における階層構造と伝達の関係性 大久保博樹 (駿河台大学)

<あらまし>音響情報が効果的に伝達されるには、音響情報に対して「音の演技」という演出を加える必要がある。ラジオ制作の手法である「音の演技」は実践的な暗黙知による技能であると考えられているが、これが音響情報においてどのような位置づけであるのかを考察することで、ドラマの音響効果音から人の発話まで、様々な局面における音響情報の最適化をいわば形式知として見いだすことが可能と考えられる。その端緒として、ここでは人の発話における韻律的情報の構成要素を階層的な構造ととらえることで、このモデルから音響情報における伝達の関係性を検討し、音響情報の階層構造という視点から「音の演技」の位置づけを試みた。

(3) 情報演習における苦手のバロメーターに関する調査研究 —アンケート結果に基づく仮説の構築— 萱津理佳 (長野県短期大学)、國宗永佳・不破泰 (信州大学)

<あらまし>学生の入学時のパソコン利用状況やリテラシー能力を把握することは、情報演習のカリキュラムを検討する上で、また実際の授業を進めるにあたり重要な要件と考え、2003 年度より入学直後にパソコン利用に関するアンケート調査を実施している。本研究では、短大の二年間を経て卒業時に、一人でも多くの学生が情報の知識およびスキルをしっかりと身につけてもらうための方法を明らかにするため、卒業時に情報教育およびコンピュータ利用に関するアンケート調査を行った。これらのアンケート結果より、Word の活用等幾つかの項目で多くの学生に教育の効果が現れていたが、Excel 等幾つかの項目では理解不足の傾向が見られる学生の存在が明確となった。そこで、これら理

解不足の学生を早期に識別し、特別な対応をすることで、卒業時により多くの学生がしっかりとした情報の知識を持つことができると考えた。そしてアンケート結果を再分析し、Excel の得意、不得意で情報演習におけるグループ分けができるのではないかという仮説を得た。今後は、本仮説に基づきグループ分けした学生に特別な対応を行うことで、卒業時に情報の知識が定着可能か検証していきたい。

(4) SCORM 2004 を拡張したダウンロード型モバイルラーニング環境

仲林清 (メディア教育開発センター, 長岡技術科学大学), 細川真伸・川上太一・佐藤一夫 (株式会社 NTT ドコモ)

<あらまし> 携帯電話とパソコンの双方から教材や学習履歴を共有して学習者適応型学習を行い、さらに、携帯電話単独でも学習者適応型学習が可能な学習環境を構築した。従来開発したシステムに、(1) 携帯電話上の SCORM 2004 互換シーケンシング機能、(2) 学習コンテンツおよびシーケンシング情報ダウンロード機能、(3) 学習履歴同期機能、を付加した。これによって、学習コンテンツの一部を携帯電話端末にダウンロードし、サーバとの通信が行えない環境でも SCORM 2004 規格に基づく学習者適応型学習を実行し、学習終了後、サーバと学習履歴を同期させることが可能となった。携帯電話キャリア 3 社の端末を用いて動作を確認し、実証実験に適用した。

(5) 教授トランザクション理論に基づく教材シェルの実行環境の開発

市川尚 (岩手県立大学, 熊本大学大学院), 鈴木克明 (熊本大学大学院)

<あらまし> 筆者らは、教授トランザクション理論に基づいて教材シェルの開発研究を進めている。本研究においては、シェル開発の前段階として、まず実行環境 (学習環境) の開発を行った。学習環境は、自由に探索可能なシミュレーションとし、部品の名前・位置・機能を学ぶ同定のトランザクション、手続きを学ぶ実行のトランザクション、予測やトラブルシュートを行う解釈のトランザクションをガイド機能として実装した。

(6) 中央大学における国家試験対策 Web 講座の事例報告 (2)

—膨大な知識を定着させるプログラムの開発—
大塚意生 (日本メディア教育株式会社)

(7) 数学教材のインストラクショナル・デザインと教材開発時間

江見圭司 (京都情報大学院大学, 京都コンピュータ学院)

<あらまし> ID に基づいた数学教材開発にかかる時間数の見積もりと実践について発表する。

(8) 遠隔大学院で論文指導をどう行うか：熊本大学教授システム学専攻の事例から

鈴木克明 (熊本大学大学院)

<あらまし> 本発表では、非同期型指導を中心として展開しているインターネット型大学院において、修士論文に向けた指導をどのように行なっているかを紹介し、同期型の要素を組み入れるタイミングとその目的を整理した。基礎的知識の習得を目指す講義では、多彩な経験のバックグラウンドを持ち学習意欲が高い社会人大学院生を相手にした場合、共同作業を組み入れながら非同期・遠隔型での展開が可能である。一方で、基礎スキルの習得を目指す実習では、スキルそのものの習得は非同期型で教えられるが、スキルの習得をより現実的な文脈に置こうとした場合に、同期型での顧客との接触とそのモニタリングが効果的であることが示唆された。修士論文のテーマ選択とそれにつながる研究計画立案のための基礎知識の習得は非同期型で十分行なえる一方で、指導教員とのレポートの確立、進捗状況の確認と励ましなどを目的とした同期型のイベント (発表会) が有効であることが示唆された。

(9) Live Communication Server を使った授業実践報告

松本哲（京都情報大学院大学，京都コンピュータ学院，信州大学大学院）

<あらまし>e ラーニング環境において，時として One on One の指導が必要であり，ライブコミュニケーションシステムを使えば，表情や操作支持等の多くの情報を伝達可能である．市販のシステムを組み合わせることで構内のネットワークに構築したライブコミュニケーションシステムを利用し，CG 基礎教育での学生の事前アンケートと，試行実践授業の結果を報告する．

(10) 大学教員の教育力向上に向けた e ラーニングコンテンツの試作

加藤由香里（東京農工大大学教育センター）

<あらまし>近年，急速に整備しつつある学内のネットワークを利用し，大学教員の教育力向上を目指した e-ラーニングによる FD プログラムについて紹介する．本コンテンツは，学内の LMS (Moodle) を利用して構築され，集合型研修に参加できない現職教員に対する情報提供および教育資源の共有の効果が期待されている．本稿では，現在，試作段階であるコンテンツ概要の紹介と今後の開発予定を中心に，東京農工大学での教員向け e ラーニングプロジェクトについて述べる．

(11) イメージによる瞬間教育（形式的に分かるから感覚的に分かるへの教育パラダイム変革）

浪平博人

<Abstract>Conventional education teach formal knowledge setting value on universality. But understanding is highly subjective matter and attained only after the grasp of meaning. So effective education should work upon personal qualia. A new educational methodology is proposed which focus on the delivery of the meaning of contents. The proposed methodology is realized through “The Dynamic Visualization” with computer and applied to several fields. The high educational effectiveness is confirmed.

(12) 「実践 MOT 教育におけるセルフアセスメント学習評価」（1）と「動的視覚化法による効率的学習の検討」（2）

大島直樹（山口大学大学院），浪平博人（大妻女子大学）

<あらまし 1 >山口大学大学院技術経営研究科が実施している実践的教授法プログラムの特徴は，教室と経営体（経営現場，製造現場ならびに研究現場）を融合した実体験の場において，教員，学生ならびに企業経営体の 3 者による実課題持込型によるアクションラーニングを展開する点にある．また，本実践的教授法プログラムでは，「MOT において実施すべきキーアクティビティ」を学習評価規準とするアンケート調査に基づく学習ポートフォリオを利用して，実践的教授手法における教育評価の測定と分析を行った．本報告では，実践的教授法プログラムとして開講した講義から，「藤光蒲鉾工業株式会社（現フジミツ株式会社）」における実践結果について報告する．

<あらまし 2 >若年層の基礎学力の低下，ものづくりに対する関心の低下などの問題を抱えており高度人材教育に関して厳しい状況が生じている．大学には，「高度な学習内容を確実かつ短時間で学習する」ための効率的な教育が求められる．そこで，高度な内容の自然科学系科目を分かりやすく教え，学習者の興味を引き出す教育を提供することを目的として，動的視覚化法による統計学教材の開発を試みた．

**(13) 知識社会におけるコラボレーティブ・ネットラーニングの活用モデル
ーe ラーニングを協働と学習のプラットフォームとして活用するにはー**

下山博志（株式会社人財ラボ，日本イーラーニングコンソシアム）

<あらまし>以下のような内容での発表があった．現状の e ラーニング開発の考察，ネットワーク上の新たな学習の場，コラボレーティブ・ネットラーニングの取り組み，Web2.0 的要素の e ラーニングへの取り組み，学習理論からの e ラーニングへの取り組み，モデルの有効性を持たせる条件，コラボレーティブ・ネットラーニングの事例．

教育システム情報学会(JSiSE) 2007 年度第 2 回研究会 報告
「Web テクノロジー／一般」

担当：研究会委員 不破 泰／小松川浩／野崎浩成

本年、7月14日(土)、千歳科学技術大学(北海道千歳市)において、2007 年度第 2 回研究会を開催しました。北海道内外から多数の参加者を得て、大変有意義な討論の場を設けることができました。今回の研究会は、「Web テクノロジー／一般」というテーマで開催されました。研究発表は全部で 18 件、大変多くの研究発表が行われました。研究発表一覧を文末に示しました。今回の研究会では、Web テクノロジーを活用した教育支援、学習コンテンツの開発・評価、メディアに関する調査研究、など幅広いテーマの発表がなされました。

研究会の前日には、小松川委員のご尽力により、「千歳科学技術大学施設見学会」と「プレ懇親会」を開催しました。千歳科学技術大学の最新の設備を見学した後、参加者同士で懇談を深めることができました。また、研究会当日のお昼は、千歳空港を離発着する飛行機を間近に眺めながら、参加者の皆さんと一緒に食事を取ることができました。迫力満点のパノラマビューがとても印象に残っています。

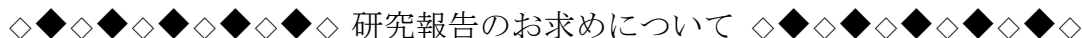
最後になりましたが、研究会開催にあたり、多大なるご支援を頂きました「NPO 法人 ホトニクスワールドコンソーシアム」様に厚くお礼申し上げます。

■開催日：2007 年 7 月 14 日 (土)

■会場：千歳科学技術大学

- [1] **メディア接触が日本語の学習ストラテジーに及ぼす影響**
-中国語および韓国語母語話者を対象に-
朴 延子, 野崎浩成, 江島徹郎, 梅田恭子 (愛知教育大学), 平田賢一 (岡崎女子短期大学)
- [2] **e-Learning 教材アノテーション共有システムの開発と評価**
國宗永佳, 横山健造, 新村正明, 不破 泰 (信州大学)
- [3] **動画時間軸上のアノテーションを共有する授業評価学習支援システム**
大倉孝昭, 開沼太郎 (大阪大谷大学)
- [4] **デジタルペンを活用した遠隔型教育の実践**
川西雪也, 佐藤 秀, 今井順一, 小松川浩 (千歳科学技術大学)
- [5] **授業支援システムと e ラーニングの連携に基づく学習カルテの提案**
山川広人, 杉山秀則, 小松川浩 (千歳科学技術大学)
- [6] **e ラーニングにおける新しい協調学習方式とその実現の提案**
何 嵩昊 (北海道情報大学大学院), 齋藤健司, 斎藤 一, 前田 隆 (北海道情報大学)
- [7] **インターンシップの受入れサポートとして、e ラーニング手法を導入事例**
田中良一, 佐藤秀明(株式会社DN P エルエスアイデザイン人材開発), 林田行雄 (佐賀大学)
- [8] **習得語彙により個別化を行う英文 Web ページ検索システムの開発**
杉山秀則 (メディア教育開発センター／千歳科学技術大学)

- [9] NS/NNS 文書分類モデルに基づいた日本語文章の推敲支援
田中省作（立命館大学）、小野 望、持尾弘司（筑紫女学園大学）
- [10] 連句のアニメーション化の一検討
高田伸彦（金沢学院大学）
- [11] Web ベースでの講義コンテンツ制作環境構築事例
濱川優介、溝上恵美（ビジネス・ブレークスルー大学院大学）、
加地正典（ビジネス・ブレークスルー大学院大学／熊本大学大学院）
- [12] 遠隔学習者に対する包括的サポートシステムについて –実績をもとにした新たな試み–
右代美香、不破 泰、國宗永佳、新村正明（信州大学）
- [13] SNS における Web 日記を介した大学生のコミュニケーションに関する研究
梅田恭子、内藤祐美子、野崎浩成、江島徹郎（愛知教育大学）
- [14] 視聴状況のフィードバックとしおり機能を付加したストリーミング受講画面の開発
濱川優介、原 秀文（ビジネス・ブレークスルー大学院大学）、
加地正典（ビジネス・ブレークスルー大学院大学／熊本大学大学院）
- [15] 他者情報取得インタフェース構築のための問題理解に基づいた注目対象者推定
小尻智子、米谷 昭、渡邊豊英（名古屋大学大学院）
- [16] 教師の教育ポリシーに基づくコース学習をサポートするエージェントシステムの開発
高橋辰徳（千歳科学技術大学）、上野春毅、小松川浩（千歳科学技術大学）
- [17] グループでの学習活動を支援するシステムの利用実践
金子大輔（北星学園大学）、登リ口泰久、小松川浩（千歳科学技術大学）
- [18] 学習達成度と主観的感性に基づく学習支援方略の数理モデル
磯本征雄（岐阜聖徳学園大学）



研究報告のバックナンバーを購ご希望の方は、株式会社毎日学術フォーラムまでお申し込みください。1部1,300円（送料共）です。残部切れの際はご容赦ください。

株式会社毎日学術フォーラム
〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1 パレスサイドビル2階（東コア）
TEL 03-6267-4550 FAX 03-6267-4555
e-mail maf-sales@mycom.co.jp URL http://maf.mycom.co.jp

なお、JSiSE 会員で「研究報告」の年間購読（購読料は送料込みで年間4,000円）をご希望の方はJSiSE 事務局 TEL (06-6990-3638)、Eメール (secretariat@jsise.org) までご連絡ください(年間6回)。この際、ぜひ年間購読されますようおすすめいたします。
(教育システム情報学会 研究会委員会委員長／竹内章)



教育システム情報学会(JSiSE) 2007 年度第 3 回研究会 報告
「問題を中心とした学習支援およびスキル支援／一般」

担当：研究会委員 小尻智子／柏原昭博／平嶋宗／曾我真人

2007 年 10 月 20 日(土)に、名古屋大学において 2007 年度第 3 回研究会を開催いたしました。10 時半から 16 時まで、7 件の発表が行われました。参加者は 29 名でした。

本研究会のテーマは、「問題」に焦点をあてた学習支援およびスキル支援であり、関連する研究発表は 3 件でした。具体的には、プログラミング問題に対する協調学習履歴からの問題解決知識の抽出に関する研究、学習コミュニティ形成による作問学習支援システムの開発に関する研究、動画を用いたスキル学習において動画の再生ペースや操作方法がもたらす学習活動・結果への影響に関する研究がありました。各発表に対して活発な質疑応答・議論があり、テーマへの関心の強さを感じることができました。研究会後の懇親会では、参加者同士の親睦を深めるとともに、発表された研究に関するさらなる議論をすることができ、大変充実した時間を過ごすことができました。

■開催日：2007 年 10 月 20 日(土)

■会 場：名古屋大学

1. 協調学習履歴からの問題解決シナリオの抽出

箕将英, 小尻智子, 渡邊豊英(名古屋大学大学院),
山田武士, 岩田具治(NTTコミュニケーション科学基礎研究所)

協調学習中に学習者は他者と議論をしながら自身の解を個人のノートに導出する。したがって、会話履歴や個人のノートには問題解決のための知識が含まれる。プログラミングなどの問題は複数の小問題から構成されるため、協調学習では小問題ごとに議論され、学習者は話題に対応して解を導出していく。協調学習履歴を利用する学習者にとって、小問題ごとにヒントと解がわかることが望ましい。よって協調学習履歴における知識を学習者によって付加されたアノテーションに基づいて抽出し、小問題ごとに議論知識グラフとして構造化する。学習者は議論知識グラフを用いることによって小問題に対する知識を容易に検索することができる。

2. 作問に基づく学習コミュニティ支援システムとその適用

平井佑樹, 樫山淳雄(東京学芸大学大学院)

本研究では、学習者が学習内容に対する問題を作成することで学習コミュニティを形成し、そのコミュニティ内で問題に関する評価や議論を行うことで、コミュニケーションをしながら学習ができる学習支援システムを開発した。本論文では、開発したシステムとシステムを大学の講義に適用した適用実験について報告し、実験結果を考察する。

3. 動画を用いた組立てスキル学習支援環境の検討

浦尾彰, 三輪和久(名古屋大学大学院)

Recently, instructional videos have been widely used in educational settings. Many researchers have proposed that learners who can control the pace of the video perform better than learners who cannot control the video. In this study, we examined the effects of controllability and learning pace in a video-based learning environment. The experimental results showed that controllability affected learning activities, but did not affect learning effects. The results also indicated that learning pace affected neither learning activities nor learning effects.

4. ディベートによる情報活用の実践力の育成 —高校生を対象とした授業実践—

福上慎吾, 野崎浩成, 江島徹郎, 梅田恭子 (愛知教育大学)

本研究では、普通教科「情報」を履修する高校2年生297名を対象に、約5ヶ月間にわたって、ディベートを用いた授業実践を行った。そして、ディベートにおける役割の違いが情報活用の実践力にどのような影響を及ぼすのかを検討した。その結果、①ディベートの役割を「教師が決める」場合と「生徒自身が決める」場合、この2つを比較したところ、両者の間に情報活用の実践力の育成には差がみられないこと、②情報活用の実践力の技能のひとつである「処理力」においては、役割の違いによる有意な差が認められ、「立論」>「第1反駁」=「第2反駁」, 「質問」>「第2反駁」であったこと、などが明らかとなった。すなわち、ディベートで「立論」や「質問」を行うことが、「処理力」の育成に有効である可能性が示唆され、その理由が考察された。

5. 情報活用能力を育成するためのリテラシー教育とその評価法について

村上広一, 山崎初夫, 寺田幸正 (名城大学)

2006年度から高校の教科「情報」を履修した学生が入学している。筆者等は、2004年度からコンピュータリテラシー教育の授業を担当し、名城大学理工学部1年生に対して全員を初級・中級クラスに分け、同じカリキュラムでコンピュータリテラシー教育を行ってきた。本報告では、学生の進捗状況を確認するために入学直後と前期授業終了後に同程度の試験の実施とその評価を行った。合わせてアンケートによる学生の意識調査も行ったのでその結果を報告する。

6. ダイアグラムによる交渉の解析

三浦隆志, 片上大輔, 新田克己 (東京工業大学大学院)

本稿では論争ダイアグラムを用いて記述されたオントロジの作成を支援し、そのオントロジによって、交渉のログにラベル付けを行い、その結果をダイアグラムに反映することで解析支援を行うツールを提案する。本研究では、題材を同じテーマの元に複数の交渉を行う交渉コンペティションとし、そこで本ツールを用いて作成したオントロジの評価とオントロジによるラベル付けを行った交渉ログからのスキル抽出を行った。評価実験の結果から、精度測定によるオントロジが対応する交渉ログ範囲の把握と、論争ダイアグラム、論理フロー、発言データによる交渉ログの比較をすることによって各交渉ログの交渉スキルを比較することができた。

7. Development of tutoring system to understand loan interest rate decision theory

中村正治(金城学院大学), 中山恵子(中京大学), 近藤 仁 (南山大学)

This paper is the study on the loan interest rate decision tutoring system by the application of e-learning system. Today the e-learning system is a practical tool in a higher education. The environment of e-learning system become highly sophisticated system by the application of networks and using intelligent terminals. However, the research and discussion of e-learning system is very few about the content of e-learning system. Therefore, in this paper, we propose the e-learning system



2007年度第5回研究会 開催案内

担当：渡辺成良，佐々木 整（研究会委員会）

■テーマ：モバイル・ユビキタス学習環境／一般

■開催日：2008年1月25日（金）

■会 場：八王子学園都市センター
東京都八王子市旭町9番1号
八王子（東急）スクエアビル 12階 第1セミナーホール
<http://www.hachiojibunka.or.jp/gakuen/gakuenn-top.htm>

■主 旨：

インターネットをはじめとする情報通信技術は、近年目覚ましい勢いで進歩しており、教育内容や学習環境が大きく変化しています。特に、様々な場所に情報を埋め込むとともに、どこからでも情報にアクセス可能とするユビキタス・モバイル技術は、現在の教育や学習のあり方そのものに変革をもたらす可能性を秘めており、非常に注目されています。今回の第5回研究会では、こうした背景を踏まえて、昨年度と同様にモバイル・ユビキタス技術を利用した教育実践や、最先端の教育・学習支援システム開発の発表を予定しております。奮って、ご参加ください。

■発表申込み：

2007年11月22日（木）にて申込終了予定

■発表原稿の提出：※発表原稿提出締切：2007年12月21日（金）

1. 原稿はA4用紙で、2枚以上8枚以下の偶数枚でお願いします。
2. 原稿は、学会誌巻末に掲載している学会誌原稿執筆要項に準拠してください。
3. 原稿送付先

●郵便で送付される場合

〒533-8533 大阪市東淀川区大隅 2-2-8
大阪経済大学内 教育システム情報学会事務局

●電子メールで送付される場合

e-mail secretariat@jsise.org

(注) PDF形式にて送信下さい。

■お問い合わせ先：

拓殖大学 佐々木整

Tel：042-665-8514

E-mail：sasaki@cs.takushoku-u.ac.jp



新入会員の紹介

新入会員（敬称略）

(会員 No.)	(氏 名)	(所 属 機 関)	(会員種別)
JSiSE-A0702624	松本 真吾	静岡大学	準会員
JSiSE-A0702625	釜賀 誠一	尚綱大学	正会員
JSiSE-A0702626	櫻井 良樹	NEC ラーニング株式会社	正会員
JSiSE-A0702627	吉川 厚	(株)教育測定研究所	正会員
JSiSE-A0702628	谷口 弥子	熊本大学大学院	準会員
JSiSE-A0702629	小柏 香穂里	山口大学	正会員
JSiSE-A0702630	石原 一彦	岐阜聖徳学園大学	正会員
JSiSE-A0702631	仲道 雅輝	日本福祉大学	準会員
JSiSE-A0702632	安達 和年	松蔭大学	正会員
JSiSE-A0702633	大内 可人	九州東海大学	正会員
JSiSE-A0702634	松野 良信	有明工業高等専門学校	正会員
JSiSE-A0702635	大森 宏	東京大学	正会員
JSiSE-A0702636	鈴木 浩之	静岡大学大学院	準会員
JSiSE-A0702637	香川 順子	大阪大学大学院	正会員
JSiSE-A0702638	樽井 勇之	(学) 上武大学	正会員
JSiSE-A0702639	木田 裕子	仏教大学	準会員
JSiSE-A0702640	菅原 真悟	法政大学	正会員
JSiSE-A0702641	鈴木 栄幸	茨城大学	正会員
JSiSE-A0702642	大崎 理乃	信州大学	準会員
JSiSE-A0702643	中川 雄祐	日本大学大学院	準会員
JSiSE-A0702644	板宮 朋基	慶応義塾大学大学院	準会員
JSiSE-A0702645	倉山 めぐみ	広島大学大学院	準会員
JSiSE-A0702646	福田 珠希	熊本大学	準会員
JSiSE-A0702647	小林 正幸	筑波技術大学	正会員
JSiSE-A0702648	喜久川 功	富士常葉大学	正会員
JSiSE-A0702649	今井 功	千葉市立新宿中学校	正会員
JSiSE-A0702650	星野 大輔	創価大学大学院	準会員
JSiSE-A0702651	三代沢 正	セイコーエプソン (株)	正会員
JSiSE-A0702652	奥村 博造	長野大学	正会員
JSiSE-A0702653	前川 道博	長野大学	正会員
JSiSE-A0702654	喜多 敏博	熊本大学	正会員
JSiSE-A0702655	新村 正明	信州大学	正会員
JSiSE-A0702656	田中 頼人	慶応義塾大学	正会員
JSiSE-A0702657	矢原 充敏	東海大学福岡短期大学	正会員
JSiSE-A0702658	田上 博司	阪南大学	正会員
JSiSE-A0702659	森 秀樹	(株) CSK ホールディングス	正会員

2007 年度新入会員（2007 年 5 月 25 日～2007 年 9 月 27 日）

■■事務局より■■

年末年始
事務局閉鎖期間のお知らせ

事務局のあります大阪経済大学の冬期休暇に伴い、
下記の期間は事務局を閉鎖致します。

2007 年 12 月 26 日 (水) ～2008 年 1 月 6 日 (日)

会員の皆様には大変ご迷惑をお掛け致しますが、
何卒宜しくお願い致します。